

西鶴における〈身〉の表現意識  
——好色物・雑話物・武家物の場合——

平林香織\*

一 はじめに

〈身〉ということばが、人間のからだのところ、また存在の状態で、段階的あるいは重層的に表現することに着目された市川浩氏は、〈身〉の語義を次のように分類しておられる<sup>1)</sup>。

- 1・実……「実」と同語源としての〈身〉
- 2・肉……生命のあるなしにかかわらず動物一般の肉
- 3・生きたからだ……精神的自己を含んだ自己の全体
- 4・身のありさま……からだのあり方や姿、はたらく有様など、多様な「身さま」
- 5・身につけるもの……着物や身につけているものをあらわす。
- 6・生命存在・社会的な生活存在……生命を持った存在。生活、する存在
- 7・自分……「自分」と置き換えられる〈身〉
- 8・社会的自己……社会的ひろがりをもった関係的存在
- 9・社会的地位……他者との関係でまわってくる私の立場、社会的地位
- 10・全体存在・ところ……人間の全体存在を包含した概念

俳諧的な発想によって、一つの語に複数の意味を重ねながら、その微妙なずれによってことばが典折を繰り返していく西鶴の文章の中で、このように統合的な意味合いの〈身〉ということばはどのように用いられているのか。また、〈身〉は、西鶴の表現や作品の構造を理解するための微標たりうるのか。

そのような問題意識のもと、〈身〉の用例が西鶴の浮世草子においてどのように出現しているのかを調査していく中で、決まっていた作品の中に一話ないし二話、突出して〈身〉の用例の多い話(章段)があるということに気づいた(後掲表1―表13参照)。不思議とそれは三話(章)以上になることはなく、また、用例が作品全体に平均的に分布しているというのではない。たまたまそうなっているだけなのか。少なくとも、右のように〈身〉ということばが多義的である以上、それが一旦稼働すると必然的にその多様性を発現する力を内包していることはいえそうである。

ところで、木村正中氏は、本文批判の観点から、『蜻蛉日記』において「同じ単語、成句、或は特殊な表現の仕方等が、極めて

\*〒380-8525 長野市三輪八・四九七 長野県短期大学

接近して、或は稍々間隔はあつても前出の語句の感覚的残影を感じさせる中に、再び表われること<sup>(2)</sup>がしばしばみられることを指摘され、このような「近接同語」の多用を道綱母の文体の特徴として認定しておられる。この概念を、菊田茂男氏は、『蜻蛉日記』の文体論に敷衍され、「一度用いられた或る特定の語句が作者の表現意識の中に根強く反芻され、その感覚的残影が固執強化されてそこに特別な主観的意味がこめられ、再び用いられるという複雑な構造をもつもの」であると指摘しておられる。<sup>(3)</sup>

西鶴作品において〈身〉という語はしばしばそのような近接同語的に出現する。もともと多義的な意味合いを持つ〈身〉は、同一の語が微妙に意味をずらしながら近接して繰り返される近接同語の装置としていかにもふさわしい。とすれば、そこには『蜻蛉日記』における「自然に生動する生命感や、心情・感覚のリズムのままに、思念や官能のありのままを、ある特定の事象や対象に密着して表現する一つの散文精神<sup>(4)</sup>」の表われの一端としての近接同語の多用とは、おのずから異なる西鶴の表現意識が垣間見えるのではないか。

そこで、本稿では紙幅の関係で、西鶴の浮世草子のうちいわゆる好色物、雑話物、武家物といわれる作品について、具体的な用例を見ながら、多用される〈身〉のありようを考える。

次頁の表1〜13は本稿で採り上げる作品について話(章)毎の〈身〉の用例数を一覧表にしたものである。

## 二 好色物の場合

『好色一代男』は、一話の長さが短いため、〈身〉の用例も一〜三例にとどまる話が大半であるが、巻五の一「後は様つけて呼」の用例数は六例とおよそ他の章段の二倍になっている(表1

参照)。この章は、巻四から巻八までの所謂後半部の始まりの章であり、勘当が解け遺産が転がり込み諸国放浪を終えた世之介が、まず、太夫吉野を身請けする話である。当代随一の遊女を妻に迎えるという粹人としての安泰が、後半部の世之介の大臣ぶりを保障するという点で、後半の初発を飾る重要な一章である。

小刀鍛冶の弟子駿河守金綱が吉野に出会う場面で〈身〉という語が近接同語として連続使用される(①〜④)。金綱は、恋する吉野が自分にはとても手の届かない社会的な位置にあることを嘆いている(①)。それを知って、吉野が彼を呼び入れる場面で、金綱の〈身〉と吉野の〈身〉が対照的に表現され(②〜④)、彼女が体をはって情けを掛けたということが強く印象付けられる。

・吹革祭の夕暮に立しのび、及事のおよばざるはと、<sup>(5)</sup>程いと口惜と歎くを、或者太夫にしらせければ、其心入不便と、儼に呼入、こゝろの程を語らせけるに、身をふるはして、前後を忘れ、うそよごれたる貞より、泪をこぼし、此有難き御事、いつの世にか、年比の願ひも是迄と、座をたつて逃てゆくを、袂引とよめて、灯を吹けし、<sup>(6)</sup>帯もとかずに抱あげ、御望に身をまかすと、色く下より身をもだえても、彼男氣をせきて、勝間木綿の下帯とき懸ながら、誰やらまいると、起るを引しめ、

その夜のことを聞いた世之介は「それこそ女郎の本意なれ」と感動し、吉野を身請けして妻に迎える。ところが親族一同の反発にあい、吉野は悲しむ(⑤)。しかし挫けることなく健気に尽くし続ける彼女の器量と教養を一門すべての人々が認め(⑥)、世之介の妻として歓迎されるにいたる。

・是を一門中よりは道ならぬ事とて、見かぎりしを、吉野が<sup>(7)</sup>身にしては悲しく、御異見申お暇乞て、責而は御下屋敷に、

〔章段毎の〈身〉の用例数〕（網かけ部分は突出して用例の多い章段）

表1 『好色一代男』

巻1の1	3	巻2の1	1	巻3の1	3	巻4の1	2	巻5の1	6	巻6の1	3	巻7の1	1	巻8の1	2
巻1の2	0	巻2の2	1	巻3の2	0	巻4の2	4	巻5の2	1	巻6の2	3	巻7の2	1	巻8の2	1
巻1の3	0	巻2の3	1	巻3の3	2	巻4の3	4	巻5の3	1	巻6の3	2	巻7の3	3	巻8の3	0
巻1の4	3	巻2の4	0	巻3の4	2	巻4の4	2	巻5の4	2	巻6の4	1	巻7の4	2	巻8の4	1
巻1の5	2	巻2の5	0	巻3の5	1	巻4の5	2	巻5の5	1	巻6の5	1	巻7の5	3	巻8の5	2
巻1の6	2	巻2の6	2	巻3の6	2	巻4の6	1	巻5の6	3	巻6の6	1	巻7の6	4	巻8の6	0
巻1の7	0	巻2の7	3	巻3の7	3	巻4の7	3	巻5の7	0	巻6の7	2	巻7の7	3	巻8の7	0

表2 『諸艶大鑑』

巻1の1	2	巻2の1	5	巻3の1	3	巻4の1	3	巻5の1	5	巻6の1	5	巻7の1	8	巻8の1	6
巻1の2	7	巻2の2	6	巻3の2	2	巻4の2	9	巻5の2	4	巻6の2	2	巻7の2	7	巻8の2	2
巻1の3	0	巻2の3	2	巻3の3	4	巻4の3	9	巻5の3	7	巻6の3	5	巻7の3	2	巻8の3	6
巻1の4	11	巻2の4	3	巻3の4	0	巻4の4	4	巻5の4	6	巻6の4	2	巻7の4	6	巻8の4	4
巻1の5	4	巻2の5	10	巻3の5	4	巻4の5	1	巻5の5	1	巻6の5	5	巻7の5	3	巻8の5	1

表3 『好色五人女』

巻1の1	4	巻2の1	4	巻3の1	3	巻4の1	2	巻5の1	3
巻1の2	6	巻2の2	2	巻3の2	9	巻4の2	5	巻5の2	1
巻1の3	1	巻2の3	2	巻3の3	5	巻4の3	2	巻5の3	3
巻1の4	6	巻2の4	2	巻3の4	7	巻4の4	6	巻5の4	4
巻1の5	0	巻2の5	2	巻3の5	10	巻4の5	6	巻5の5	4

表4 『好色一代女』

巻1の1	9	巻2の1	1	巻3の1	7	巻4の1	2	巻5の1	8	巻6の1	4
巻1の2	2	巻2の2	4	巻3の2	6	巻4の2	8	巻5の2	7	巻6の2	5
巻1の3	4	巻2の3	11	巻3の3	3	巻4の3	2	巻5の3	7	巻6の3	11
巻1の4	14	巻2の4	4	巻3の4	4	巻4の4	4	巻5の4	5	巻6の4	9

表5 『男色大鑑』

巻1の1	0	巻2の1	10	巻3の1	7	巻4の1	5	巻5の1	8	巻6の1	5	巻7の1	13
巻1の2	6	巻2の2	10	巻3の2	5	巻4の2	7	巻5の2	9	巻6の2	5	巻7の2	6
巻1の3	6	巻2の3	2	巻3の3	4	巻4の3	4	巻5の3	9	巻6の3	3	巻7の3	4
巻1の4	5	巻2の4	2	巻3の4	4	巻4の4	4	巻5の4	5	巻6の4	3	巻7の4	3
巻1の5	6	巻2の5	4	巻3の5	12	巻4の5	7	巻5の5	2	巻6の5	10	巻7の5	4

表6 『好色盛衰記』

巻1の1	1	巻2の1	3	巻3の1	6	巻4の1	3	巻5の1	12
巻1の2	4	巻2の2	5	巻3の2	8	巻4の2	5	巻5の2	9
巻1の3	3	巻2の3	2	巻3の3	7	巻4の3	0	巻5の3	3
巻1の4	3	巻2の4	2	巻3の4	1	巻4の4	1	巻5の4	1
巻1の5	4	巻2の5	0	巻3の5	4	巻4の5	4	巻5の5	3

表7 『西鶴諸国はなし』

巻1の1	0	巻2の1	1	巻3の1	4	巻4の1	0	巻5の1	1
巻1の2	1	巻2の2	1	巻3の2	1	巻4の2	2	巻5の2	0
巻1の3	3	巻2の3	5	巻3の3	0	巻4の3	1	巻5の3	2
巻1の4	1	巻2の4	0	巻3の4	4	巻4の4	2	巻5の4	1
巻1の5	2	巻2の5	1	巻3の5	0	巻4の5	0	巻5の5	0
巻1の6	0	巻2の6	0	巻3の6	0	巻4の6	0	巻5の6	1
巻1の7	2	巻2の7	0	巻3の7	5	巻4の7	1	巻5の7	1

表8 【本朝二十不孝】

巻1の1	2	巻2の1	7	巻3の1	10	巻4の1	6	巻5の1	4
巻1の2	8	巻2の2	7	巻3の2	2	巻4の2	7	巻5の2	4
巻1の3	3	巻2の3	5	巻3の3	3	巻4の3	9	巻5の3	3
巻1の4	2	巻2の4	2	巻3の4	1	巻4の4	3	巻5の4	5

表9 【懐硯】

巻1の1	3	巻2の1	2	巻3の1	2	巻4の1	2	巻5の1	3
巻1の2	6	巻2の2	3	巻3の2	3	巻4の2	0	巻5の2	2
巻1の3	6	巻2の3	3	巻3の3	3	巻4の3	3	巻5の3	5
巻1の4	4	巻2の4	1	巻3の4	1	巻4の4	2	巻5の4	0
巻1の5	2	巻2の5	0	巻3の5	3	巻4の5	0	巻5の5	2

表10 【本朝桜陰比事】

巻1の1	1	巻2の1	1	巻3の1	4	巻4の1	7	巻5の1	1
巻1の2	1	巻2の2	0	巻3の2	0	巻4の2	0	巻5の2	1
巻1の3	0	巻2の3	0	巻3の3	1	巻4の3	2	巻5の3	2
巻1の4	5	巻2の4	4	巻3の4	1	巻4の4	1	巻5の4	0
巻1の5	1	巻2の5	0	巻3の5	0	巻4の5	1	巻5の5	3
巻1の6	1	巻2の6	0	巻3の6	1	巻4の6	2	巻5の6	1
巻1の7	0	巻2の7	0	巻3の7	0	巻4の7	0	巻5の7	2
巻1の8	4	巻2の8	1	巻3の8	1	巻4の8	3	巻5の8	1
		巻2の9	3	巻3の9	1	巻4の9	0	巻5の9	0

表11 【武道伝来記】

巻1の1	5	巻2の1	7	巻3の1	7	巻4の1	8	巻5の1	6	巻6の1	12	巻7の1	2	巻8の1	8
巻1の2	10	巻2の2	4	巻3の2	9	巻4の2	4	巻5の2	3	巻6の2	2	巻7の2	5	巻8の2	4
巻1の3	13	巻2の3	5	巻3の3	0	巻4の3	4	巻5の3	6	巻6の3	4	巻7の3	2	巻8の3	3
巻1の4	7	巻2の4	3	巻3の4	1	巻4の4	2	巻5の4	1	巻6の4	4	巻7の4	2	巻8の4	6

表12 【武家義理物語】

巻1の1	3	巻2の1	5	巻3の1	3	巻4の1	6	巻5の1	7
巻1の2	6	巻2の2	4	巻3の2	1	巻4の2	8	巻5の2	2
巻1の3	7	巻2の3	5	巻3の3	1	巻4の3	1	巻5の3	5
巻1の4	1	巻2の4	0	巻3の4	5	巻4の4	9	巻5の4	3
巻1の5	2			巻3の5	5			巻5の5	6

表13 【新可笑記】

巻1の1	4	巻2の1	4	巻3の1	6	巻4の1	10	巻5の1	0
巻1の2	4	巻2の2	4	巻3の2	2	巻4の2	2	巻5の2	2
巻1の3	3	巻2の3	1	巻3の3	1	巻4の3	11	巻5の3	9
巻1の4	4	巻2の4	1	巻3の4	3	巻4の4	5	巻5の4	3
巻1の5	4	巻2の5	5	巻3の5	1	巻4の5	6	巻5の5	3
		巻2の6	2						

置せられ、折節の御通ひ女にと申せ共、中へ御聞分もなし、何とて世之介殿の、吉野はいなし給ふまじ、同じ女の身にさへ、其おもしろさ限なく、やさしくかしこく、いかなる人の煙子にもはづかしからず。

太夫としての肉体を小刀鍛冶の弟子に惜しげもなく差し出す吉野と、その様子に彼女の清廉な精神を感じる世之介。遊女であろうと町人の妻であろうと、常に心身一如、謙虚に生きる吉野の姿が〈身〉という統合的な語の繰り返しによって表現されている。

次に『諸艶大鑑』で最多用例数十一例(表2参照)を数える巻一の四「心を入れて釘付の枕」を見てみよう。都で太夫高橋の馴染みだった角内が江戸の吉原で下男に〈身〉を落していた(①)。

雪の日の太夫薄雲のお迎えで薄雲を背負い、光輝く薄雲の〈身〉に接する(②)。近接同語としての〈身〉によって、角内の〈身〉に焚きしめた伽羅の香に思いがけず感乱する薄雲の高揚感が表現されている(③)⑤)。単なる物理的な体の接触以上の気持ちの通い合いを表現する語として〈身〉という語はいかにも相応しい。

・太鼓持の役として。夕部は無理酒のあいをさせられ、埒もあかぬ端哥をほめ、女房どものかくす事まで。人中でかたらせ。世に身過程悲しき物はなし。かくお氣に入ても。此年の暮に。金子貳角と古袴。やうくだされて袴両じや。

・角内が背中に乗うつり給ふありさまは。女来善光におわれ。御身よりのひかり。今の玉虫色の御小袖。しま黄金の肌。胸高にあけ掛。縁ある衆生は。あの御懐にすくひ入給ふ。

・大門筋の辻越。身にあたる風もひややかに。おのづから心もしめやかに。かわひらしきかほり。我袖の外を聞に。正しく角内が袂よりかよはせ。人の心をそよになしぬ。猶髪にも深く留て。此やさしさ言葉ではいわず。身もだへし

て。宿にかへりて其儘。やり手の久米にたうね給へば。角介常にはさもなく。太夫さま負にまいる時は。むくつけなる下男の。あらゆる髪を匂ひ。薄雲さまにきかせましてはと。しほらしき心さしから。伽羅に身をなし候

続いて薄雲が角内の境遇を問い詰め(⑥)、角内がこれまでの経緯を語る(⑦)。そこで雉子に〈身〉を変じてでも角内についていきたいという高橋の思いが伝えられる(⑧)。

・そなたさまは何として。都の高橋さまを見捨。あづまの爰にいやし身をなし給ふはとあれば。まんざら左様の事は。しらぬ貞つきすれども。問れてはや泣くみ。かさねて物をもいわずありける。

・祝言取をうたてく。二親こらしめのために身をかくし。弘法大師のまします山に入て。墨染の形にかへる世と。まことなき書置を残し。又高橋には生駒の麓にさそはれ。追鳥狩に二三日も。見まじや貞はせをと申せば。我身も雉子になりたや。君があたりにとらへられて。御機嫌のよきをば見たしと。

「我身も雉子になりたや」という高橋の言葉は、自分の〈身〉を雉子に重ね見るものだが、それは、薄雲が高橋に気持ちを重ねている姿(⑨)や岩に砕ける高浪に我〈身〉の程を重ねている角内の感慨(⑩)と通じ合う表現である。自分の〈身〉を別のものや別の人間に重ね合わせて人生の局面を乗り切るきっかけとする発想が連続している。角内は京に戻って高橋に再会し(⑪)、高橋は薄雲の〈身〉の振る舞いに心を打たれ太鼓持ちらしき「思出の吉介」に返礼を託す。

・薄雲も取乱し。高橋とのの身になつて見ての悲しさ。あたりには剃刀おかねはよいが。命の程心元なし。  
・此所のわたくし雨。濡るゝをいとはず急ぐに。田子の入海

を見おろし。親しらず。子しらすといふ。岩根高浪に。身の程をおもひらやれ。おきつ川をわたりて。

・荷物ほとけば。都の花車道具あまた。是はよふこそ。持てまいつたれと。其内色品見合。こま／＼と文認すぐに。うす雲方へ。礼に人つかはし。其身は京都に上り。高橋にかたれば。又是からも。思出の吉介を仕立。よし原へ返事送りける先に検討した『好色一代男』巻五の一「後は様つけて呼」における吉野と金綱、吉野と世之介という図式と同様の、角内と江戸の薄雲、角内と都の高橋という二重構造的な図式に「へ身」という表現が適合している。

『好色五人女』では巻三「中段に見る厩屋物語」における用例が、三十三例とぬきんでて多い(巻一・十七例、巻二・十二例、巻四・二十一例、巻五・十五例)。とくに巻三の二「してやられた枕の夢」の十例と巻三の五「身のうへの立聞」の九例(表題を含めると巻三の五も十例)は特異的である(表3参照)。

巻三の二「してやられた枕の夢」は、生命存在そのものや社会的営みとしての「へ身」に対する感慨の記述で開陳する(①②)。灸を据えた際の文字通りの身体的な触れ合いがきっかけで茂右衛門を恋慕するようになった腰元のりん(③④)。おさんは、りんの茂右衛門宛の恋文を代筆し(⑤)、茂右衛門からの返事を代読する(⑥)。それが自分本位な内容だったので、茂右衛門を懲らしめるためにおさんがりんの「へ身」代わりになる(⑦)が、うっかり寝過し契りを交わし(⑧)おさん自身が恋に落ちてしまふ(⑨⑩)。灸を据えるという肉体的な「へ身」に関わる行為、そして寝過ごしている間の肉体関係というおりんおさんの身体的な恋の始まりという点で、からだにこころを添わせていく恋といえそうである。恋の始まりを記述する表現において、「へ身」という心身

両面を表す重層的な語が有効に用いられている。

・爰に大経師の何がし年久しくやもめ住せられける。都なれや物好の女もあるに品形すぐれてよきを望ば心に叶ひがたし。詫ぬれば身を浮草のゆかり尋て。今小町といへる娘ゆかしく見にまかりけるに。

・此男東の方に行事有て。京に名残は惜めど身過程悲しきはなし思ひ立旅衣室町の親里にまかりて。あらましを語しに折節秋も夜嵐いたく冬の事思ひやりて。身の養生の為とて茂右衛門灸おもひ立けるに腰元のりん手かるく居る事を多たれば。是をたのみて。

・塩灸を待兼しに自然と居落して。背骨つたひて身の皮ちぢみ苦しき事暫なれども。居手の迷惑さをおもひやりて目をよさぎ齒を喰しめ堪忍せしを。りんかなしくもみ消して

・おさんさま江戸へつかはされける御状の次手に。りんがちは文書とらせんとざらん／＼と筆をあゆませ茂のじさままいる身よりとばかり引むすびて。かいやり給ひしをりんうれしく。

・去ながら着物羽織風呂銭身だしなみの事共を其方から賃を御かきなされ候はしいやながらかなへてもやるべしとうちつけたる文章

・とてもの事に其夜の慰にも成ぬべしとおさんさまりに成かはらせられ身を木綿なるひとへ物にやつしりん不断の寝所に暁がたまで待給へるに

・七つの鐘なりて後茂右衛門下帯をとときかけ闇がりに忍び夜着の下にこがれて裸身をさし込心のせくま／＼に言葉かはしけるまでもなくよき事をしすまして

・枕はづれてしどけなく帯はほどけて手元になく鼻紙のわけ

もなき事に心はづかしく成てよもや此事人にしれざる事あらじ此うへは身をすて命かきりに名を立茂右衛門と死出の旅路の道づれとなをやめがたく心底申きかせければ茂右衛門おもひの外なるおもはく違ひのりかゝつたる馬はあれど君をおもへば夜毎にかよひ人のとがめもかへりみず外なる事に身をやつしけるは追付生死の二つ物掛是ぞあぶなし

また、卷三の五「身のうへの立聞」の場合は、冒頭で、おさん茂右衛門のあさましい〈身〉持ち①について言及され、「いたづらかたぎの女」が男にとつては情けないものだと記述される②。その情けない閉塞状態から抜け出したくなった茂右衛門は、偽装心中によつて死んだと都の人々に思わせてあるにもかかわらずのこのこと都の様子を見に出掛けていく。死んだはずの茂右衛門と生きている茂右衛門という存在の二重性をもつ危うさが何度も繰り返される近接同語〈身〉によつて表現される③④⑤。そしてそのような二重性を孕んだ茂右衛門の社会的な〈身〉のありさまがおさんの身うちによつて糾弾される⑥⑦⑧。

・あしき事は身に覚て博奕打まけてもだまり傾城買取あげられてかしこ貞するものなり喧嘩しひけとる分かくし買置の商人損をつゝみ是皆闇がりの犬の糞なるべし中にもいたづらかたぎの女を持あはず男の身にして是程なきけなき物はなし

・茂右衛門そのりちぎさ闇には門へも出さりしがいつとなく身の事わすれて都ゆかしくおもひやりて風俗いやしけになし編笠ふかくかづきおさんは里人にあづけ置無用の京のぼり敵持身よりはなをおそろしく行に程なく広沢のあたり

・おのれには預り手形にして銀八拾目の取替あり今のかはり  
に首おさへても取べしと齒ぎめして立けれ共世にかくす身の是非なく無念の堪忍するうちに又ひとりのいへるは茂右衛門

は今にしなすにどこぞ伊勢のあたりにおさん殿をつれて居るといふよい事をしほると語る是を聞と身にふるひ出て俄にさむく足ばやに立のき三条の旅籠屋に宿かりて水風呂にもいらず休けるに十七夜代待の通しに十二灯を包て我身の事すへくしれぬやうにと祈ける其身の横しまあたごさまも何としてたすけ給ふへし

・亭主聞とがめて人遣し見けるにおさん茂右衛門なれば身うち大勢もよふしてとらへに遣し其科のかれず様々のせんぎ極中の使せし玉といへる女も同じ道筋にひかれ粟田口の露草とはなりぬ

【好色五人女】卷三ではおさんの結婚が語られる第二章でおりんとおさんの入れ替わりに端を発する不義の叙述が始まる。気働きのする大店の女主人と浮気ないたづらものというおさんにおける二面性や、入れ替わったり死を装ったりするおさんと茂右衛門における二重性が、先に見た【好色一代男】や【諸艶大鑑】同様〈身〉が多用される所以といえよう。

【好色一代女】ではへ一代女が新町の遊女となり初めて〈身〉を売りにする巻一の一四「淫婦の美形」の用例が十四例と突出している(表4参照)。色里における心と体の問題に初めて直面した状態を表現するために〈身〉という語はいわば必須のものといえよう。

冒頭に登場する「袖乞の女」の落ちぶれた〈身〉を「我身」に引き比べている二重写しの表現①②は、生まれはそれなりの血筋であったへ一代女が、転落の人生をたどることの暗示となっている。遊里特有の〈身〉の表現③④⑤⑥⑦⑧、遊女としての社会的位置を認識する表現④⑥⑧⑨⑩、遊女勤めに関する肉体的

な〈へ身〉のありさまの描写(⑦⑧)といった多様な〈へ身〉に関する表現が入れ代わり立ち代わり出現し、初めての遊女づとめにあつて〈へ身〉の置き所を模索する〈一代女〉の様子が語られる。彼女は最終的に、〈へ身〉に備わる徳もない我が〈へ身〉であるが(⑫)、売られた〈へ身〉ではあつても売らない〈へ心〉という矜持を持つ(⑬⑭)にいたる。

・清水の西門にて三味線ひきてうたひけるを聞ばつらきは浮世あはれや我身。惜まじ命露にかはらんと其声やさしく袖乞の女。夏ながら綿入を身に掛冬とは覺てひとへなる物を着事はけしき四方の山風今。

・五拾兩にて我を自由とするかたもなく、鳥原のかんばやしといへるに身を売。おもひよらざる勤め姿年もはや十六夜の月の都にならびなき

・いつぞの首尾にくどきかゝらば我物とおもひつくより、物もろふ欲を捨大じんの手前よしなに申なし。世上のとり沙汰の時も身に替てひくぞかし。

・其形は人にもおとらずして定りの紋日も宿やへ身あがりの御無心。男ありて待良には見せけれども、宿よりそこ／＼にあしらひ片陰によりて当座漬の茄に生醬油を掛けて膳なしにひえ食くふなど外の人が見ねばこそなれ。

・銀遣ふ客ををるそかにして不断隙で暮すは、主だふし我身しらすのなんひんなり。只興女は酒なんどの一座は所／＼にて、りくつづめなるつめひらきすこし勿体も付、むつかしく見せて物数いはぬこそよけれ。物に馴たる客は格別、まだしき素人帥はをそれてこなす事ならず。床に入ても其男鼻息斗せはしく身うごきもせずたま／＼いふにも声をふるはし。我物を遣ひながら此せつなき。茶の湯こゝろへぬ人に上座のさ

ばきさすに同じ。

・大かたの男、近く寄添てかた足もたすをなをだまりて、それから後の様子を見るに、身もだへして汗をかき相床をきけば、あるいは愛染又は初対面から上手にてうちとけさせ、

・ましてや分のよき女郎に身を捨るは断りぞかし、別の事もなき男を初対面なればとてふるにはあらず、其男大夫に氣をのまれ仕掛の時分しほあひぬけ、しらけて起別るゝ事なり。流れの身として男よくて惱事にはあらず

・万事おとしつけて居たる客には大夫氣をのまれて、我と身にたしなみ心の出来て、其男する程の事かしく見えてをそろしく。位とる事は脇になりて機嫌をとる事になりぬ。

・跡はむかしの座敷となりけると伝へし。身にそなはりし徳もなくて。貴人もなるまじき事を思へば天もいつぞはとがめ給はん。然も又すかぬ男には身を売ながら身をまかせず。つらくあたりむごくおもはせ勤めけるうちに、いつとなく人我を見はなし明暮隙になりて、をのづから大夫職をとりてすぎにし事どもゆかし。

当然のことながら「好色一代男」の吉野も「諸艶大鑑」の薄雲も太夫としての〈へ身〉の処し方を初めから認識していた。しかし〈一代女〉はそうではなかった。既存の太夫としての〈へ身〉の処し方に甘んじないで、「身を売ながら身をまかせず」というような自意識を貫き「つらくあたりむごくおもはせ」た挙句人々に見放され太夫職を失つてしまう。以後、三十に近い職業遍歴を重ねるが、彼女はいつもその〈へ身〉に応じた〈へ心〉の切り替えによって、衰えゆく肉体に挑戦し続けることになる。その根底には本章に見られる「身を売ながら身をまかせず」というバランス感覚がある。それを獲得するプロセスが〈へ身〉ことばを使って豊かに表

現されているといえよう。

『男色大鑑』は各話の平均丁数が四丁強と長く、また作品全体の〈身〉の用例も最多であるから、全体的に多くの用例が分布する(表5参照)。肉体的な〈身〉に関する厳しい規範意識と精神的な〈身〉の関係性を重視する男色を描く際に、〈身〉の用例が多くなるのはいわば必然的な現象であるともいえる。

最大用例数十四を提示する巻七の一「螢も夜は勤免の尻」を見てみよう。客の慰みのために肉体を提供する若衆や幫間の〈身〉の様子が具体的に描写され(③④⑥)、またそれゆえの精神的な〈身〉のつらさが繰り返し訴えられる(①⑤⑦⑨⑫)。

若衆は肉体を客に提供するという点で遊女と同じ境遇にあり、『好色一代女』巻一の四「淫婦の美形」に共通する〈身〉の用法を看取することができる。用例⑧⑩⑪の近接同語として繰り返される〈身〉は「遊女に同じ」勤めの〈身〉の厳しさを伝えている。しかし、へ一代女が「身を売ながら身をまかせず」というふう<sup>⑧</sup>に自身を二重化することによって「流れの身」としてのアイデンティティを獲得したのとは裏腹に、本話では〈身〉を売りものにする<sup>⑩</sup>ことへの違和感が〈身〉の用例を増やしている。「身に心を置」(②)ことで舞台子としての社会的な〈身〉に徹するという記述と対比的に、幫間に〈身〉を落とした村岡丹入が、捕らわれた盗人役をやらされるといふ屈辱的な〈身〉のありさまに、心の置き所を失いかけるという描写がある。とはいえ祝儀をはずま<sup>⑨</sup>れて「心かはりて」欲より〈身〉を売ること<sup>⑪</sup>に心を留めようとする(⑥)。一方若衆半太夫は、ひそかに螢を放つて自分を慰めてくれた法師が、立ち去るときに足を踏み外して溺死する(⑬)という事件を経て、勤めの〈身〉に心を留めきれず、ある情深い人

物に〈身〉請けされたのをきつかに出家する(⑭)。

・身過程世にかなしき物はなし。万につけておろかなる事もなく。見えわたりたる中も。殊更色道の太鼓もち心永う物毎堪忍つよきかもと手なるべし。

・殊更一座客のこなし調謔しめやかに情ふかく。たよ／＼としてよはからずうちまかせ身にも心を置ぞかし。

・半太夫は床入してより言葉数なく近寄ず。其客に気を悩ませ身をもだへさせ。少しはせく心の時一生忘れぬ程の嬉しがる事を。只一つ小語て首尾の仕掛

・さるほどに夜神楽の庄左衛門口笛にもろ／＼の大鼓おもひ抱ておかしさも今なり。此座に村岡丹入とてむかしは何がしの二男方にかしく其身持いやしからず。大氣にして人のにくまぬ生れ付なりしが。

・其ま／＼心かはりてさても且那大分見事なはづみと。欲より身の程をわすれて知恵も才覚もかくして。万事を愚鈍に見せかけて。生まれつきからうとき人にまはされて。

・又供つれぬ身の気のどくは草履あづけしもそこ／＼にせられて帰るさにかたし／＼取集めて。鉦がはや駕籠に付て御供を申。

・爪のながき手を打懸られ楊枝つかはぬ口をちかく寄られ。木綿のひとへなる肌着身にさはりておそろしきに。革たひの匂ひ籠りて鼻ふさげば衆道の分もしらずしてふんとしとき掛る。銀が敵と是非もなく自由させながら。ひみつのすまたを持ってまいり。夜更起別るゝまでにかばかり年を寄しぬ是みなわが身の徳にはならず。親かたの為ばかりにして。一しほうたてかりき。され共此勤めのせつなき事を忘れけるは。万

人男女共に気をうつし。現なき風情に姿の自慢。宿に帰れば太夫さまくとあまたの人のそだてつるに。身くたくる事もしらざりき。是を思ふに薄命の身に替らず。品こそ連へ遊女に同じ。

・又興になりて見しに此輩人なれて。ひかりを灯とあらそひ。半太夫が袖にとまれば。蚩も同じ身の上と。平安城の道行を語れば。

・石垣踏はづし。あらけなくいたむと見へしが。ふりつゝきし雨の高浪つねの浅瀬にかはりて。哀や其身を沈めをのくかけつくるまに。かげも形もなくなりて

・其後さる御かた様の情ふかくなりて。役者の身請をあそはし。大仏の辺り紙漉町に住しうちにも。彼法師が心入あはれに忘れず。槓の尾にとり籠て出家となりける。

「彼法師が心入あはれに忘れず」念仏三昧の暮らしをする半太夫であるが、法師は夜毎に半太夫の夢枕に立ち、毎日仏前の花を生ける。肉体的な〈身〉の美しさを持つ若衆としての半太夫に対してだけではなく、出家となって姿が変わり、また、自らが生き〈身〉を失つても、心を通わせる。いわば、心を主体とする〈身〉の有りようの表現といふことができる。

『好色盛衰記』では巻五の一「後家にかゝつて仕合大臣」の用例が十二例と群を抜いている(表6参照)。人々から「女の鑑」と評される酒屋の後家(③)が、自分の〈身〉持ちの堅さを強調しつつ、南隣に住む江戸で勘当され(①)京都へ流れ着いた落ちぶれ大臣(②)が自分に恋を仕掛けて迷惑しているという偽りの相談を任職に持ちかけて、逆に大臣を閨房に招きいれようと画策する。後家が任職に〈身〉の潔白を語る際に後家としての〈身〉

の堅さが強調される(④)〜(⑥)。後家の告発に戸惑う落ちぶれ大臣であるが、それが男を誘うための方便と気づき後家と懇ろの仲になっていく。やがて次第に煩わしくなり関係を断つにいたる(⑦)〜(⑫)。〈身〉ことをたどるだけで、次々と変化する局面における千差万別の大臣の表情が豊かに伝わってくる。

・親の身として。久離を切事。大かたならず。

・金子三十兩給しりを。半とせあまりになくなして。けふまでは暮せしが。明日の身のうへかなしく。今といふ今。喰ねばひだるき事を覚へ。

・此女に二つになる娘の行すへを思ひやりて。若盛に後家たてすまして。身をかためけるを。今のいたづらの世にくらべて。此人女の鑑といへり。

・わたくしは後家ながら浮世の事は捨し身なるに。執心のかよはせ文。数くおくられけれども。返り事するまではなく。うち捨しに

・わたくしは後家の身にて。とがむる男もなければこそ。外へかやうの事を申されぬがよし。

・そなたの旅といひ。京に親類とてもなく。此たび不首尾あつては。身の立所なし

・是はおもひもよらぬ難題。すこしも身に覚えなき事なり。御耳へ入たるは誰にもせよ。相手生てはをかじと進むを。御坊すこしも驚給はず身ぬけのならぬ証拠あり。其方書付てやられし忍びやう。段々是へ後家まいられて。面談にての断なるが。まだ是にてもあらそひ給ふか

・此方覚はなけれども。其後家爰に来て我身事いへるは、いかにしてもうまひ所有

・かさねぶとん留木のかほりふかくやはらか成まくらひと

つ・身もぢぢむばかりにおそろしく、嬉しく、しはしはさま  
 くの物おもひせしが、高が後家にはまきれなし。

・左門といへるに気をつくし、情のかさなるうちに帥が身喰  
 とや、都に隠れなき、両替の何がしとはりあひ。

・伏見の豊後橋にて山伏姿となつて、月待日待御一代の吉事  
 御判はんじける、看板出せしが我身のうへは何とみるぞかし  
 潔癖な表の顔とその下に隠れた空圍をかこつ顔という後家の二  
 重性は、〈身〉の構造がもつ多層性と通底するものである。これ  
 は、『好色五人女』巻三の一におけるおりんとおさんや巻三の五  
 における社会的に死んだ茂右衛門と生きている茂右衛門という二  
 重構造が〈身〉の表現の多様化をもたらしていたのと同じ表現意  
 識の現れといえよう。

以上が好色物における多用される〈身〉の様相である。肉体と  
 心のバランスが問題化しがちな好色物にあっては、肉体の表現と  
 しての〈身〉、それに起因する精神的な〈身〉のかなしさが共通  
 の認識として底流しており、何かのきっかけでそれが表現の磁場  
 に現れやすい。そのきっかけとなるのが、二項対立や二重性とい  
 った重層的な要素であるといえよう。

### 三 雑話物の場合

『西鶴語国はなし』の場合、各話の長さも短く、話毎の〈身〉  
 の用例数も少ない。したがって、最大用例数が巻二の三「水筋の  
 ぬけ道」と巻三の七「因果のぬけ穴」のそれぞれ五例ずつとい  
 うのが数字の上で特異的なものといえるかどうか断定するのは難し  
 いところである（表7参照）。

しかし巻二の三「水筋のぬけ道」では、〈身〉が肉体的な意味

合い(②)と生命存在や社会的存在を表す意味合いの両面から近  
 接同語として用いられている点が興味深い(①③④⑤)。この話  
 は、女主人が身体的な嫉妬心から奉公人ひさの肉体を苛む事件と、  
 そのことにショックを受けたひさの〈身〉投げを描いた話である。  
 若狭で海に投身した遺体(③)が、遠く大和の秋篠の里の井戸水  
 に出現(④)する。そして幽体として出現したひさが女主人の顔  
 に焼け火箸を当てて報復する。肉体が減んでも残っていた恨みが  
 報復を行う。話の後半にみられる用例④「身をなげ」は話の前半  
 で使われる用例③「身をなげ」の「感覚的な残影」を背負って出  
 現した「身をなぐ」の近接同語と考えることもでき、若狭湾に投  
 じた〈身〉が秋篠の井に投じられている不思議を強調する表現と  
 して有効である。初めから終わりまで一貫して女性の肉体(顔)  
 が話の展開に重要な要件となっており、女同士争いの悲劇が  
 〈身〉ことばによって表現されているといえようか。

・火箸をあかめて、左の脇貞にさしつけけるに、皮薄なる所  
 やけちよみて、女の身に<sup>①</sup>しては、此かなしき大かた、乱気に  
 なつて、年月手馴し、鏡台にむかへば、貞おかしくなるを、  
 身もだへしてなげき、世にながらへても、せんなしとおもひ  
 極め、心にある事書置して、小浜の海に、身をなげけるに、  
 其夜は沖浪あらく、しかひも行方しれず、ふびんとばかり申  
 果ける。

・明の日水静になつて見れば、十八九なる者、身をなげしが、  
 岸の茨に寄添しを哀と、引あけ見るに、此里くの女とも見  
 えず、殊更十日も以前に、身捨しありさま、いと不思議と申  
 折ふし。

一方、巻三の五「因果のぬけ穴」の場合は、敵討ちの話である  
 から、用例③以外はすべて、登場人物の社会的な〈身〉のあり方

に言及したものになっている。社会的な位置やあり方を示す〈身〉の用例は武家物全体に多く見られる。「武士の身程定めがたき物はなし」という冒頭部分の表現が象徴しているように、諸国の奇談集という作品全体の中において、敵討ちを題材とする本話には、他の話に比べて、個人的な心身を意味する〈身〉から社会的な意味合いの〈身〉に至るまで、〈身〉ことばが多義化しやすいといえる。

・家中にまたなき使者男・大河判右衛門が風俗・世に見ならへといわれしに・武士の身程定めがたき物はなし・きのふ古里・豊後の国より・文遣はしけるを・女筆こゝろもとなく・明て見るに・兄煙が書こしける。

・子もなき人の御事なれば・おのくさまならで・誰か外には・たよりもなし・女の身の是非もなき仕合と・哀に申遣はしける。

・老人の自由さは・くまり時隙入処を・跡より大勢両足にとりつき・すこしも身のうごきならず・判八立帰りにて・親のくびを切・其くびさげて・にげのびけるに。

・前世にて・弥平次が一門・ゆへなき事に・八人迄うしなひければ・天此科をゆるしたまはぬを・今此身になりて覚る・其方とても・是をのがれがたし・武勇の本意をやめて・墨染の身となりて・先立し・二人が跡をよくく吊ふべし。

『本朝二十不孝』における〈身〉の用例が、〈身〉という言葉持っている多種多様な意味合いを反映したものであることについてはかつて述べたことがある。改めて話毎の用例数という視点で作品を見てみると、巻三の「娘盛の散桜」が十例と最も多いことに気づく(表8参照)。吉野の葛屋の五人娘をめぐる話で、長女

から順に四女にいたるまで、結婚する娘達がごとごとく〈身〉ごもると〈身〉二つになれずに命を落としてしまうという不幸が連続する①～⑦。前半部分では〈身〉ごもりに関する用例が近接同語として繰り返され宿命の暗さ恐ろしさを伝える。これは『西鶴諸国はなし』巻二の三「水筋のぬけ道」同様、女性の身体に関わる題材に起因する用例の多さである。

不吉な宿命を感じた両親は出家するが⑧～⑩、五女の乙女は出家を勧める両親に抵抗して家出し、山賊と結婚する。そして実家に押入り、寝ている両親の上に畳を置いて貧窮の果てにわずかに残っている家財道具を強奪する。親の〈身〉の上に畳を乗せるといふ畳の用途を逆転させた身体的な表現は、子が親に反逆する行為を示唆するものであろう。あげくに乙女は「踏馴し道筋の岩も人影と見えて心のやるせなく。知たる淵に飛入」絶命する。親の言いなりになることを拒否して自分の判断で〈身〉をかためた乙女が罪悪感故に追い込まれた挙句の〈身〉投げである。

・惣領お春といへるを其里のよろしき方へもらはれ。縁組の間もなく懐胎の身となれば。日を算月を繰産れぬ先乳媪を定め鶴亀のつきし小袖を拵へ夜更に松吹風の戸に音信るをも其事かと母の親目もあはず氣遣ひせしに。悲しや腹痛て身を悩み五七日も憂目を見せし

・かくある死人は左鎌をうたせ其身二つになさでは浮む事なく後の世覚束なしといふにぞ。猶かなしく沐浴其通りに念仏講中を頼みける。女の身程、はかなきはなかりき。

・度々懲てうたてく。諸神に祈誓をかけ。平産は身の養生是を大事と。ことになれたる祖母を履ひ腹帯のしめ加減。庭はたらきに身をこなし。腰をすこしもひやさず目通りより高く手をあげさせず。寝姿も足を伸さず。かしらは関枕にてと

め。身をかたむるに残る所なく喰物をもあらため産月を待けるに。

・泪は袖行水に経木を書いて流れ淮頂を立。親の身の子を吊ぶは逆川に沈て死なれぬ命のつらく。

・弥菩提心を起し。常精進の身と成称名の暇なく。香花を摘て。四人が跡を吊ひ片陰に取籠ければ表屋は昔とあれて野犬のふしどゝ成ぬ。発心の身と成ても心にかゝる山の端は。乙女と云て五人めの娘今は十五になりぬ。

『懐硯』の場合も、『西鶴諸国はなし』同様一話の長さが短いため、巻一の二「照を取昼舟の中」と巻一の三「長持には時ならぬ太鞍」の用例が六例と多いが、群を抜いて多いといえるかどうか微妙なところである(表9参照)。

巻一の二「照を取昼舟の中」は、放蕩して勘当の〈身〉となつた(③)ものの地道に商売をして〈身〉を立て直し、故郷へもどる旅の道中(②④)、船上での博打で財産をすべて失う(①③⑥)男の話である。「身拵え」ということが近接同語として用いられた(④⑤)、非日常的な場にあつて用心をする姿と無一文になつた姿とを対照させる。〈身〉のもろさが強調された結果用例数が多くなつているといえよう。わずかに数時間のうちに一財産が無に帰してしまつた男の悲哀を表現するものとして冒頭の「人の身はつながらぬ舟」の譬えは巧みである。

・人の身はつながらぬ舟のごとし。伏見の浜の浪まくら爰に一夜をあかして。昼の下り舟あらば大坂までのたよるとながめわたれば。きのう夕へ大かたは出舟の跡淋しく。

・便船のことはり聞て情ある人々は胴の間に乗りつりければ。我は火床の前に身をすゝめて。人の菅笠にもさはらす船頭に

もよい天気と機嫌とり

・廿二の時勘当にて江戸に下りてそれより越中に立越おのづからにふむ塩の山。年月世をかせぎて身のつらさをわすれず。此五とせあまりに金子三百両仕出し。

・いづれも旅巧者成すれもの。損徳なしに埒を明末大坂へは舟のうへ六里半枚方あたりより身拵して竹杖までも取まわし。万事に気を付るうちに

・舟より直に長堀親のもとへはゆかずして又身拵して明荷物⑤を小者にもたせはる／＼古里に帰る甲斐なく歩行にて越中に下りぬ。かりにもせまじきものは博奕わざ家をうしなひ身を捨るのひとつ是ぞ。前ぶたに三つがあがるにしたらせまじき物ぞ

また、巻一の三「長持には時ならぬ太鞍」は武士の話における〈身〉の多用の例である。『西鶴諸国はなし』巻三の五「因果のぬけ穴」と同じように、武士という題材が、奇談集としての表現に〈身〉ことばを上乗せしている(①)〜(③)といえよう。

浪人の娘が困窮の一家(④)を救うために遊女に〈身〉売りする(⑤⑥)という話の展開は、状況に応じて〈身〉のありようを変化させる女性の姿を捉えているという点で、おさんやへ一代女、また、『好色盛衰記』の後家に通底する。

・残る四人おとろきしばらくは抜もあはせず身ふるひせしを又宍人鬘さきを切付首尾良く立退を辻番手柄を見るより心して門うたずして通しける。

・たゞ今追手のかゝる者。身を隠してたまわれ万事はたのむといへど答ふるあるしもなく十五六なる娘形のやさしけなるがひとり留守して

・女に手むかひはならず三人ともに身をひそめ難儀の折から。

近所の人々あつまりてとやかく詮議の所へ。

・世の人は千とせをのぶる盃事水を呑力もなくて。此まゝ朽果る身のならひ日影にうつむ苔の石にて手をつめたるごとくになりぬ。

・此島つゞきに隠し遊女ありて。契を当座切にさもしき事なるに是にあたら身をしづめてわづかなる金銀にて。二親をはごくみぬる心さし艶しくあわれなり。

・いまだ其身に染らぬさきをうれしく、前金かへしてつれ帰

『本朝桜陰比事』の場合は、〈身〉がまったく使われない話が十五話にのぼる(表10参照)。その中で巻四の「利発女の口まね」の七例は多い部類である。面白いことにこれも『好色盛衰記』五の一「後家にかゝつて仕合大臣」同様後家の空聞に関する話で、やはり後家が偽りの告白をする。したがって後家の〈身〉持ちに關する表現がみられる(①)が、話の展開としては、逆に後家が実際に忍んできた浪人の〈身〉(②)をかばった上で、〈身〉の潔白を証明するというものである。『好色盛衰記』では後家の二面性が描かれていたが、ここでは「それまでは道を立ける」浪人が迷いを生じており、対極的な道に赴くことのある〈身〉のあり方の二面的側面が浮き彫りにされてもいる。

また、後家は、「身に開茸」という「難病」があるという方便を用いる(④)が、「身」「難」という文字の組み合わせが近接同語的に繰り返される(⑤)~(⑦)。これも『西鶴諸国はなし』や『本朝二十不孝』同様女性の〈身〉に關わる題材故の用例の多さともいえる。そして、ここでの近接同語は、『西鶴諸国はなし』巻二の三「水筋のぬけ道」の「身をなげ」、『懷硯』巻一の二「照

を取昼舟の中」の「身拵へ」と同じように、話に仕組まれたからくりを解く鍵となることばの仕掛けとして、後家の方便に引っかけり馬脚をあらわす浪人が追い込まれていく様を巧みに表現している。

・後の世を願ひ人のおもはくとは格別に身をおさめ。ことし髪置したる一子に頼みをかけて。此成人待て外には何の願ひもなく

・此宿を立帰る姿には見せて門を出さまに立忍び。板敷の下に隠れて家内しづまつて後。身をちよめて奥に入。後家が寝間に立よれば

・此義はあの者亭主相果申後私も妻子なき身に御座候へば。たがひに申かはし内証にて念比仕申候うちに。

・わたくしにおゐて不義つかまつらん子細御座候。若ひ時より身に開茸と申難病を請申候。

・此たびの義に是非もなき身の難を申しあげ候は大かたならぬ因果とぞんじたてまつり候と泪を洒す。時に窄人罷出あの女の申上候通り身の難病もたがひに語りあい私の手にかけて過し年の寒中養生ましてとらせ候と申し上る。其時後家大笑ひして我等の身に開茸と申わづらひ御座無く候。

以上、雑話物の場合には、女性の身体、武士の身分に關わる題材が採用された話に〈身〉の多用がみられた。そして〈身〉の多様化には、好色物と同様に二面的な登場人物の〈身〉の持ち方が寄与している場合があることが確認できた。また、〈身〉と何らかの語が組み合わされた近接同語による表現が、奇談や裁判話のトリックを暗示するものとして有効に用いられていることも特徴的なことといえよう。

## 四 武家物の場合

『武道伝来記』も『男色大鑑』同様一話の平均丁数が四丁強と長いが、巻一の三「噂略といふ正月」の十三例が突出している(表11参照)。武家物として武士の〈身〉について心身両面から指摘する用例(①)~(⑤)以外は、切腹を控えた十太郎が遊女花の宴と関係を持つ場面、近接同語的に使用されている。男性同士の敵討関係と男女の恋愛関係ということが十太郎の〈身〉に重なった結果である。積極的に十太郎に迫る花の宴に対し(⑥)~(⑦)、それを喜びつつも一方で敵を持つ〈身〉であるからと深入りを恐れ、花の宴の迫力に気おされつつ〈身〉を引こうとする十太郎(⑧)~(⑬)の微妙で複雑な心境が、〈身〉という語を繰り返し用いることによって読者に伝えられる。死を覚悟した男にかつてないエロスを感じた花の宴は男と共にタナトスに〈身〉をゆだねていく。

- ・ 智あるも死ぬる事をすく人はなく。女は子共の身の上を思ひ。餅花に春をさかせ。千よもと折る松立かざり。
- ・ 外戚の叔母東本願寺のすゑの道場に縁付しておはしける。此許に身を隠し都ながら花なき里の心ちして。
- ・ 此義はそもく私の上よりおこりし事。舎兄十太郎のかはりに我ら切腹仕るやうに横目衆へ御申入頼み奉る
- ・ 十太郎は元来覚悟の身にて。今更おどろく事もなく。御嘆きをやめさせ給へ。人を殺してのがるべき身にあらず。
- ・ 十太郎より女郎の心ふかく乱れて。夕暮急ぐ床の情。是に偽りさつてもだくとなり行心。かしらから身を其人の物にして。しやらほとけの黒髪いとはず。
- ・ 我ながらを立初六年の日数あるうちに。それにこしらへ置

銀が敵の身なれば。貴賤のかぎりもなく逢見し中に。  
 ・ 大かたならぬ因果と心底うち明て語る時。十太郎身には嬉しき事をいさます。是はかたじけなさあまりてとかふ言葉にのべがたし。然れ共ぞんじ寄有身なれば御情も今宵をかぎりかさねてはまたあひましての事といへば。太夫申かゝつてせき面。扱もく口惜。此身にまことすくなしと御うたがひもにくからず。近道に証規と小指噛きるをやうく留め。我ら事おぼしめしの外なる身にて都を見しも今晚ばかり。鶏鳴ば東に行て。八月十四日に相果る至極段語り聞せ。男なきに前後を忘れ身にはひはなかりけり。太夫聞になを哀れのまさり。死せ給ひて濟事ならば所にかまひは候まじ。いざ自と同じ道にと思ひ切たる気色を見て。爰は大事とふんべつをめぐらし。いまだよしみなきにさばかり御心ざしのうれしき。神もつて忘れがたし。さもあらば宿なる身じまひして最後は爰に來て明日の事と契約しておそろしやと立帰り。

『武家義理物語』では巻四の四「丸綿かづきて偽りの世渡り」の九例が最多である(表12参照)。浪人の娘が、遊女屋への〈身〉売りや大名の母親の側室勤めと偽られ、そのことがわかってからは仮病をつかい食を断ち断固として遊女となることを拒み通し〈身〉を果てるといふ話である。遊女に関する記述が用例数を増やしているというのは、右に見た『武道伝来記』の場合と共通する。

武士の〈身〉の定め難さの表現(④)よりも遊女に〈身〉を落とすに至る表現(①)~(③)~(⑤)~(⑦)が圧倒的に多い。娘は結局遊女となることを拒み通す(⑧)。死に貧した娘には親元への帰還を約束する人々の呼び掛けの言葉(⑨)も届かず、「我も武士の子」

という言葉を遺して不帰の人となる。

《二代女》が「身を売ながら身をまかせず」と言い切ったのも異なる「身を売れて。身を売女良」となることを拒否しきった武士の娘の《身》の有り様が描かれている。

・きのふ夢。けふは又思ひ川の瀬に替りゆく流れとて。いと  
しからぬ男に身をこらし。まんざら偽りの泪。

・此程の遊女は。むかしのごとく。かふき者にはあらずまづ  
しき親の渡世のたよりに身を売れて。身を売女良とは成ぬ。

・関ヶ原陣に高名其隠れなき何の守とかやの孫娘。父浪人の  
身と成今の都の北の山里。物のわびしき住ひ。煙の種に拾ひ  
あつめし。落葉の宿。

・母人同心まし／＼て。娘が後の身のためとや。それをこそ  
願ひなれ。万事はおぬしさま頼むよし。

・岸根つゝきの里めつらしく浪の流れの身と成事は浮鳥かた  
らず。口鼻もだまりて。

・此子は松に極めて。なるべき者と。すへたのもしくおもひ。  
身の欲ながら外より大事に掛しに。それまでは遊女に成とも  
おもはざりしに。小林といへる禿を。松山さまといはせて天  
職に仕たて明日より水あげに出すといふより。我身の事と覚  
悟して。遊女に成べき事口惜く。

・人／＼是をかなしく其身流れにはなざじ。無事の姿を見立  
親里におくりまいらせんといへと。今更それを聞入らずして

好色物との題材の共通性による流れの《身》に関する用例の多  
さは、作品集にとって異質な話柄が扱われることが契機となつて  
いるという点で、雑話物の中で武家が題材なることによつて  
《身》の用例数が増加していたのと同じ現象である。

また、武家の娘としての《身》と遊女としての《身》の狭間に

立たされた時の《身》のあり方を問うという点で、二重構造的な  
要素が話に内包されているといえよう。その結果《身》の有する  
多層的な世界が反映しやすくなっている。

『新可笑記』の場合は巻四の三「市にまぎるゝ武士」の十三例  
である(表13参照)。この話の大半は、筑後の國守に仕えたのち  
市井に隠居する男(①②)が、男の様子に興味をもって訪ねて来  
た「心ある人」に語って聞かせる(③④⑤)部分からなる。男は  
尋ねてきた人を「意味ふかき市人」、すなわち、話をするのに不  
足のない人物とみなし、「珍らしくも」自分のことまで「物語り」  
する。男の長い一人語りは武士としての《身》の処し方を説く前  
半(③④⑤)と、かつて筑後で経験した事件を引き合いに出しつ  
つ(⑥⑦⑧)、「武芸粗略」で横笛に夢中になり無益に勤めを終えたこ  
とを後悔交りに語る(⑨⑩⑪⑫)後半とからなる。語りの前半の  
《身》はすべて近接同語と言ってもよく、武士としての社会的位  
置を様々な状況下で表現するものである。日ごろは沈黙を守り社  
会から隔絶された男が、《身》ことはを機関銃のように吐き出す  
姿は、一人語りという主観的な文体の中に表現された孤独な老人  
の存在確認といえるのかもしれない。それは武士の《身》と隠居  
の《身》の狭間で揺れ動く男の心身の表現でもある。

・爰を見立て寂莫の苔の扉を閉。人倫絶て身を隠し。年月お  
のづから忘れて息引取れるまで既に横の外はなし。さながら  
仙家の境界かくなる社心からの心なれ。是に楽しみ極る時は  
悲しみあり。此身もけふを暮すべき糧につくれば馬の杵を作  
りて海辺の市にたつも是非なし。

・されば武士の身は何國を住家と定めかたし自分の外人の事  
にも義理の一命を捨るも習ひぞかし。

・すこしの事に身を捨るなどざりとは口惜き仕合せ。一分の理り立かたく。其家を失ひける其身分際相応の所領に預り私⑤の事に命を果すは木石同事の心底なり。

・是を考へ身の用心すへしとかしこき人此道を示されし。今時の武士身を修るとて小者に月代までいたさせ鬚は気づかひして自身にそり。又は内義に打任せたるあり様此用心愚なる故なり。子細は家来に氣遣ひする程の身ならば。自然の時も此下へ逃さり。何の役にか立へき。

・夜道は無刀にしてそこをとをらず。身の難を通れ安し。常住怖しきは畳の上なりと莊子が達生篇にも用心の事をかけり。矢をはぐ人は通して命を取悪心あり鎧を感ずる人は弓矢を通れ身を助くる善心あり。念は通ずる大事。今此身に覚えたり。

・武芸粗略にしてすゑは閑居を願ひ。横笛の音をたぐひもなく好み入しにおのづから此身になりて世を送れり。

・二人とりふせければ残る吾人安堵して拔身鞘におさめし所を異義なく取て搦めぬ。

以上、武家物においては、遊女に関する話題の登場と登場人物の語りという要件が〈身〉の用例を多くしていることが確認できた。そこには、やはり男と女、武士の娘と遊女、藩士と浪人という対比的な構図が内包されており、必然的に〈身〉が多用されやすくなっている。

#### 五 おわりに

好色物、雑話物、武家物について、〈身〉が多用される一話(章)ないし二話(章)を取り出してその表現を分析してきたが、

登場人物の社会的な〈身〉が二重性を担っている場合、あるいは、短編集全体を括るテーマとは異質な題材が組上にあがった場合に、〈身〉ことばのスイッチが入るといふことは確認しえたように思う。少しずつ意味をずらしながら繰り返される〈身〉ことばの響きが、様々なせめぎあいのなかで自己の位置を確認しようとする人物たちの声を多様な和声に仕立てあげる。

「人は虚実の入れ物」(『新可笑記』序)という相対的な西鶴の現実認識に照らして、多義的な〈身〉は様々な虚実を盛り込むことのできるかっこうの「入れ物」だったのではないか。「天道言ずして国土に恵みふかし。人は実あつて偽りおほし。其心は本虚にして物に應じて跡なし」という『日本永代蔵』冒頭のことばはあまりにも有名であるが、「実」を「実」と読ませたくもなってくる。無論「実」は「身」である。人も心も西鶴にとつては虚であることが実態であったのだ。〈身〉は「物に應じて」いかようにも表現し得た。

上田三四二は、西行の〈心〉が〈身〉から「あくがれ」ようとする表現意識について次のように述べる。<sup>8)</sup>

西行に生得の異状感覚、その心と身の分離感彼の「あくがれ」の生れる源泉であり、歌人西行の歌人たるべき理由であったが、「あくがれ」はまた世のつねの、世俗の生活を不能にした。(中略)あくがれによって世を捨てるほかなかつた西行は、世俗の側から見れば世を捨てたのだが、詩人の側より言えば、真に世に生きたのである。心を先立て、身は辛くも心に随って、西行は真に世に生きたのである。

「西行のうかれゆく心」とも言われる心身の分離を孕む西行に対して、長明は「身から心を取り出し」「心を責めつづけ」、兼好においては、「心身永閑」の境地のもと身と心は「心即身、身即

心の命の立場にたって融合されている」という。<sup>(10)</sup>「型の文化」が開花した近世に入り、いかに類型化された「身」のなかに「心」を入れ込むかというテーマが突きつけられた。西鶴はどうか。まだまだ材料不足であるし、つなぐべき点はあまりにも多い。本稿で触れ得なかった町人物や遺稿集における「身」ことはへの言及も含めて今後の課題としたい。

注

\* 西鶴の浮世草子の引用は中央公論社版定本西鶴全集所収の本文による。

- (1) 「「身」の構造」(講座・現代の哲学2「人称的世界」一九七八・四)、「「身」の構造——身体論を超えて」(一九八四・二、青土社・講談社学術文庫版は一九九三・四)等参照。  
 (2) 「蜻蛉日記の文体構造と本文批判」(『国語と国文学』第37巻第3号、一九五九・三)、「蜻蛉日記本文批判の方法」(『国語と国文学』第38巻第3号、一九六〇・三)参照。  
 (3) 「道綱母の文体」(『国文学』一九六〇・一〇)参照。  
 (4) 菊田茂男「蜻蛉日記」の表現についての試論」(『文化』第32巻第3号、一九六九・二)参照。  
 (5) 拙稿「好色一代女」に描かれた「老い」(『長野県短期大学紀要』第55号、二〇〇〇・一二)参照。  
 (6) 前掲注(3)に同じ。  
 (7) 拙稿「西鶴における「身」——『本朝二十不孝』の場合——」(『長野県短期大学紀要』第56号、二〇〇一・一二)参照。  
 (8) 「西行への道——西行における心と身——」(『短歌』第33巻1号、一九八六・一)参照。  
 (9) 久保田淳「西行のうかれゆく心」(『国文学解釈と鑑賞』第53巻9号、一九八八・九)。  
 (10) 上田三四二「心と身の論」(『俗と無常——徒然草の世界』一九七六・三、講談社)。